

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.17 ^{あおい}葵ちゃん

初めての海外旅行は二十歳の時。欧州一周の、今でいう、バックパッカー旅行だった。

2月、アドベンチャー・ガールの同級生「^{あおい}葵ちゃん」の一人旅計画にちゃっかり便乗し、格安のアエロフロートで、夜中にフランクフルトに到着。ホテルは予約しておらず、寒いし、心細いし、初日にして既にカルチャーショックだった。葵ちゃんからは「エミはさあ、こういう旅、しないほうがいいと思う」ときっぱり言われてしまい、「見捨てないでくれよ〜」の気分。

当初は、即東欧に入る予定だったが、さしたる計画をしていたわけでもなく、「言葉が分かる国に行きたい!」という主張を取り入れてもらい、急遽、フランスに入った。

思えば無謀な旅だった。宿代を浮かせるために夜行列車で移動し、パリに着いたのは早朝。駅には、「どうすればこんなにまずく作れるんだろう」と思うようなサンドイッチしかなく、駅を出ようとしたら物乞いの子どもたちに囲まれ（こっちの格好もほぼホームレスっぽかったが）、ホテルを探しに“HOTEL”と書かれた建物に入って「部屋はありますか?」と聞いたら、なんとそこは“HOTEL DE VILLE（市役所）”だった。。

どんよりとしたパリの空。灰色のパリの建物。そうか、ボードレー

ルは、ありのままを書いていただけかも、と思った。
アンボワーズのカフェでお菓子を食べた時、お店の人に“Chacun paie sa part.（別々に払います）”と、覚えたままのフランス語を使って通じた時は感動だった。

道に迷い、読めない地図を広げる。気がつくと葵ちゃんが見知らぬ現地の人の袖を引っ張ってきて、「エミ、この人に聞いて。（おい、葵！ 通訳じゃねーぞ!）

さらに、珍道中は続いた。南仏の空はセザンヌの、スペインの空はゴヤの描いたとおりだった。（なんだ、色まで同じじゃん！ これを写実主義といわずになんと呼ぼう?）

バルセロナのミロ美術館では^{かび}黴の生えたパンのオブジェにのけぞった。露出狂にも遭った。サクラダ・ファミリアでは、窓から落ちそうになった。マドリッドの地下鉄では、なんと、停電を経験した。（怖いったら!）

ジェラートはおいしかったが、「なんで何千リラもする

んだよ!」とデノミの必要性を確信しつつイタリアを横断し、旧ユーゴスラビアに入った。そして、葵ちゃんの教授の恩師の所で、筆者は風邪をこじらせた。

「ごめん。これ以上寒い東欧、無理」。3週間目にして初めて、別行動となった。

帰国の前日にフランクフルトのマクドナルドで落ち合う約束をして、筆者は当時の西ドイツ、ミュンヘンへと向かった。

初めての「一人旅」。勇気を持つと決めた。1日1つはドイツ語のセンテンスを覚えることにし、映画館ではガイドブックのままに「ドイツ語に吹き替えられていますか?」と聞いてみた。「Ja!（はい!）」。……、断念。

マックで待ち合わせた最終日、実は、夏時間の初日だった。そうとは知らず「定刻」に到着したつ

もりが、葵ちゃんは真っ青になって座っていた。「エミ〜、心配したよお!」。いつしか能天気な人格に変わっていた筆者。少し慎重になっていた葵ちゃん。

その後、筆者がパリに出張中、葵ちゃんが会いに来て、そのまま住み着いた。そろそろ帰ろうかというころ、カフェでドボンと恋に落ちた。葵ちゃんは今、フランス人の旦那さんと3人の子どもとパリで幸せに暮らしている。

